

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤枝, 宏壽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5333

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

藤 枝 宏 壽

英語教室

(昭和61年10月15日受理)

1. 緒 言

1-1 英語速読力養成の必要性

高度情報化社会といわれる今日我々の周辺にはあらゆる種類の情報が洪水の如く渦巻いている。その中でも文字メディアによる情報はその確実性、検索の容易性の故に、依然として重要な位置を占めている。新聞一部にも十数万の文字が紙面を埋め尽しており、国内の定期刊行物（日刊、週刊紙）の年間（1984）発行は2,138点、同じく書籍は43,337点に及んでいる⁽¹⁾。

更に、国際化・学際化の進んだ諸科学においては関連する情報の量が年々増加・累積し⁽²⁾、特に国際語化した英語による文献の比率が高まってきている⁽³⁾。これを医学関係に限ってみても、我国の医学図書館が継続して受入れている外国の医学雑誌の数（1982年）は7,663誌に上るといふ⁽⁴⁾。世界的水準の研究を志す者にとって、この膨大な量の情報を“スピーディ”に検索・通読・精査することは“至上命令”に等しい。速読力、特に英語の速読力に対する現代社会の要求は実に高いといわねばならない。

ではこの時代的要求に対応すべき日本人学生の英語読解力は如何であろうか。「英語は読めるが話せないは、いまでは日本人の口ぐせになってしまったが、これもまた、国際的にみると、勝手の迷信のひとつであるらしい」という趣旨の“お寒い”現実が大谷(1979)、Farhady(1982)、竹蓋(1982: 128-133)等によって報告されている。大友(1981)も日本人のTOEFL(1976-77)の成績と世界(非英語国)平均とを比較し、総合成績で483点对504点(90ヶ国中77位)、listeningでは50点对51点、structure and written expressionでは47点对49.4点、そしてreadingでは48点对50.3点であったと報じている。読むことを中心に行なわれて来た日本の英語教育界にとってはショッキングな資料である。

日本人の英語読解力の貧弱さはまた、英語を母国語(L1)とする者、第2国語(L2)とする者、外国語(FL)とする者との対比において読みの「速度」を比較検討する時、決定的烙印を受ける(表1参照)。7~8年間英語教育を受けて来た大学生にして、英米人の小学1年生程度の読解速度しかないというのである。

〔表1〕 学生の英語速読力報告例(訓練前) WPM*

英語	国	報 告 者(年)	小1	小3	小6	中3	高1	高2	高3	大学
L1	米 国	Taylor (1960)†	80	140	185	210			230	280
"	"	[ポストン大学]††	45	125	210					
"	"	Beers (1986)							190	
L2	ベルギー	Hill (1981)					120~150			200
"	"	Nuttall (1982)								200 [△]
FL	日 本	仙台一高 (1964)†					40~60	50~70		
"	"	佐 藤 (1970)†								85
"	"	安 藤 (1972)								75~82
"	"	Goda (1976)								75~85
"	"	永 井 (1980)†					57			
"	"	児 玉 (1984)								短大 66
"	"	山崎・吉沢(1986)					41~60			62 87

†松村(1984)所載

*分速読語数 Words per minute

††石井(1970:164)所載

△推定値

これらの実状を率直に認識する時、我国の英語教育、特に学校における英語教育の完成期に当る大学において、速読力養成の努力は必須の要件となってくるのである。

1-2 英語教育における速読の位置づけ

英語の速読は単に上述のような外的要請によってのみ必要とされるものではない。速読力は読解力そのものに欠くべからざる要因なのである。Carroll (1972: 36-37)は英語の読解力の基本要素として、「言語の純粹理解」「推理行為」「速度」の3点を挙げ、羽鳥(1976: 136-137)も「速く読めること」を読む力の内容の筆頭に掲げている。また Smith (1982: 37)は“A reader is unlikely to comprehend while reading *slower* than 200 words a minute, because a lesser rate would imply that words were being read as isolated units rather than as meaningful sequences. ...limitations of memory prevent sense being built up from isolated words.”と述べて comprehensionには fast reading が必要であると主張している。Grellet(1981: 16)にも同趣の発言がある。

他方、日常におけるreadingの言語活動から見ても速読の要素は大きい。従ってreadingをskimming, scanning, extensive reading, intensive reading, (thorough comprehension, critical reading)等のskillに分けて指導すべきだとする説が多くある(Krashen & Terrell 1983: 134-135, Grellet 1981: 4, Clarke 1977: 50-51, Eskey 1973: 72-73, Phillips 1984: 289-290)。文章の要旨、概要を求めて速く読む“skimming”, 特定の情報のみ求めて目を走らせる“scanning”, 話の筋を追って大量に、楽しみながら読む“extensive reading”には言うまでもなく読む速度が大きく関わってくる。その他に、原文を一字一句残さず精査し、行間に至るまで完全に理解し、更にこれを批評・鑑賞する“intensive reading”が必要とされる場面も当然あるが、この精読のみに終始して速読を除外したのでは読みの指導としては大きな片手落ちといわねばならない。

特に母国語とは著しく言語構造の異なる英語を外国語として学習する日本人には「直読直解」という特殊な課題がある。我国の学生の中には文法を頼りに“返り読み”をし、日本語に置きかえなければ英文の意味が理解できないものが多く、更には日本語に並べかえてはみたが、何を言っているのか分からないという者さえ屢々出現する。これでは「読解」ではなくて「解説」であり、非効率極まるものである。ここに英語を英語の語順で、日本語を介在させずに理解すべしという「直読直解」の主張が明治時代から繰返しなされて来た所以がある⁽⁵⁾。

速読はこの直読直解を前提とする。そして又速読は直読直解の習慣形成を助長するものと考えられる。従って速読の努力は英語学習の早い段階から既に始められて然るべきものであるが、大方の見解の様に、中級から上級、即ち高校2～3年及び大学において速読の指導を行なうのが妥当であろう(小川1965:676-677, 小池1970:95-96, 安藤1972:55-57)。而もそれは「毎分〇〇語」という明確な目標を掲げた「速読」のsessionとして訓練されるべきである。何故ならば速読力はそれ独自の訓練をしなければ伸びないことが証明されているからである⁽⁶⁾。

外国語としての英語教育における速読訓練の位置づけについてはEskey(1973:73-74)の次の言葉をまとめとして引用したい。十分に示唆に富むものである。

The one major exception to the rule⁽⁷⁾ is speed reading, a kind of extensive reading to which some class time should be devoted. ...the student who cannot read at a reasonable rate will be limited both in the volume of reading he can do and in his overall comprehension, both critical factors in higher-level reading, especially at the university level. Two hundred words a minute or better might be a goal for the advanced foreign student. No student can be pushed beyond his real capacity, but the foreign student frequently suffers from a kind of mental block in his reading of English, a conviction that he must correctly process every word if he is to understand anything at all. Since good reading entails doing precisely the opposite, no student can make normal progress in this way. The ideal reading program thus includes brief but regular work on increasing reading speed, partly for its own sake and partly as a means of demonstrating to the students that they can read faster with acceptable comprehension. (下線は筆者)

1-3 速読訓練の先行実践研究

外国及び国内において行われた速読訓練の実践成果で、主としてWPM(分速読語数)で測定・報告されているものを表2に示す⁽⁸⁾。限られた資料ではあるが、そこには概略2つの傾向が認められる。即ち欧米のL1, L2と我国のFLとの間には訓練後も読解速度について大差(3:1～2:1)が存在すること、然しながら訓練による速読力の伸び率は、L1, L2, FLを通じて

〔表2〕 英語速読訓練の成果報告例

英語	国	報告者(年)	対象者(人数)	期 間	WPMの向上	伸び率(倍)	理解度(%)
L1	米 国	{フロリダ大学}*	一般成人(175人中52人)	3ヶ月	163→310	1.9	27→35
"	"	{ダートマス大学}*	大 学 生	数週間	230→500	2.2	
"	"	{バーデュ大学}*	大学1年生(307人)	15週		1.6	
"	"	"	cf. # [非訓練組](282人)	"		1.1	
"	"	{ニューヨーク市大}*	大学生(14人)	12週	283→478	1.7	60~100
"	"	Cosper & Mills*	企業管理職(31~41才)		245→470	1.9	
"	"	"	" [46~58才]		256→414	1.6	
"	"	Beers (1986)	高校3年生(14人)	1セメ スター	190→352	1.9	<27点→35点>
"	英 国	de Leeuw (1965)	精神科医(10人)		334→647	1.9	85
L2	ベルギー	Hill (1981)	ベルギー大学生(67人)	3週△	200→314	1.6	78→78
"	"	"	cf. # [非訓練組](16人)	" △	196→226	1.2	80→82
FL	日 本	安 藤 (1972)	大学生(京大)(82~99人)	4ヶ月	82→189	2.3	58→66
"	"	"	"	6ヶ月	82→231	2.8	58→72
"	"	"	" [工繊大](61~64人)	4ヶ月	75→151	2.0	47→56
"	"	児 玉 (1983)	" [立命館大](91人)	7ヶ月	66→ 92	1.4	45→65
"	"	山 田 (1984)	" [高知大?](3人)	7週	118→175	1.5	61→75
"	"	吉田・北尾(1985)	大学生(同志社大?他)(333人)	7ヶ月	? →105	?	→54

* Lewis(1978:3-4) 所載

△ 英国に修学旅行滞在中

1.4~2.8倍に達していることである。

特に当面の関心事である我国の場合、安藤(1972)の報告した成果(8ヶ月で2.8倍の伸び)は目覚ましいものである。然し山田(1984:98)らはこれを「一種の誇大報告」として疑問視している。他方、児玉(1983)の報告は被験者も安藤(1972)の場合に近く90名程度あって、信頼性が高いと思われるが、訓練の成果は必ずしも大きくない。教育実験の諸条件が一律ではないにしても、表2に示された安藤・児玉の報告には較差がありすぎる。当今の日本人大学生の英語速読力及びその訓練成果の実態を示すデータは未だ乏しいというべきであろう。

2 実 践 研 究

2-1 目 的

大学の英語教育における速読力養成の必要性に鑑み、先ずこれを実践し、同時に学生の英語速読力習得の実態と問題点とを調査・究明して、今後学内外の速読指導の参考に供することが本実践研究の目的である。

2-2 速読指導実践の概要

福井医科大学における1982年度から1986年度までの入学生(各年度約100人)に対して、1年次或いは2年次に、1箇学期或いは2箇学期間に亙り、英作文或いはLLと並行して、毎週或

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

〔表3〕

速読訓練実践の概要

(1986.7.10現在)

年 度	人 数	訓練時期				速読の授業				組合せ授業		教材			備 考
		1年次		2年次		回数	毎/隔週	時間 (分)	延べ時間 (時間:分)	同時限	隔週	略語	RE	延べ語数 (千)	
		前期	後期	前期	後期										
82	89	.xxx				7	隔	90	10:30	—	作文	FRE I	60	18	1.9(1.9)
83	91	xxx		xxx		6	隔	40	4:00	LL	作文	PERR	82	8	?
						7	隔	40	4:40	LL	作文	FREII	69	7	
						計<13>			< 8:40>					<15>	
84	98	XXX		xxx		14	毎	30	7:00	LL	—	PFR	50	9.5	1.7(2.3)
						6	隔	20	2:00	LL	作文	PFR	50	3.5	1.9(1.9)
						計<20>			< 9:00>					<13>	
85	99	XXX				15	毎	30	7:30	LL	—	FRE I	60	17	1.4(1.5)
86	95	XXX				10	毎	30	5:00	LL	—	(PERR)	82	}8.5	1.6(2.3)
												VOA	62		

- (注) 1.人数：休学、欠席、既修得単位認定の者を除く。
 2.組合せ授業：「同時限」内にLL+速読を実施/「隔週」は作文と(LL+)速読とを1週交替。
 3.教材(テキスト)略語：
 FRE I / II = 安藤昭一, David Sell (1971) *Faster Reading in English I / II* 英潮社新社。
 PERR = 木村恒夫(監)(1970) *Practical Exercises for Rapid Reading* 英潮社新社。
 PFR = 伊藤秀一(編著)(1984) *Practical Faster Reading*, 朝日出版社。
 VOA = 中畑繁, J.ペンソン(1985), *VOA Science Report*, 南雲堂。
 4.教材：RE=Reading Ease, Flesch のリーダビリティ公式(1948)による。
 5.延べ語数：1箇学期間、速読の授業中に読ませた文章全体の総語数(概算)。
 6.備考欄の数字は表5の WPM (RATE) の伸び率である。2-4(2)C で論ずる。

いは隔週に、1回につき20～90分間、英語の速読訓練を実施して来た。使用したテキストを含む指導条件の概要を表3に示す。

訓練の手順としては、まずコースの開始に当り速読力養成の必要性を説き、次にプリテストを実施して学生各自に自分の速読力を認識させた。その後速読力を伸展させる方法を出来るだけ詳細に説明した——訳読をせずに直読直解をする、心中音読をせずに完全な黙読をする、逐語読みをせずにフレーズ読みをする、そのために目の停留回数を少くし、1度の停留で読み取る語数を殖す、受け身読みをせずに推測力を働かせて能動読みをする、等の努力項目についてである。また、訓練成果の実例を紹介して動機づけも行なった。訓練の目標として、1箇学期のコース中に150WPM⁽⁹⁾の速さで skim⁽¹⁰⁾し、60～70%の理解度⁽¹¹⁾を得ることを要望した。その他、コース最初の2、3回には目の動きを活発にするための文字・単語識別訓練も併用した。

文章の速読演習では、150～500語の文章を読み終える毎に各自に計時⁽¹²⁾させ、理解度テストを終えた⁽¹³⁾後に早見表でWPMを算出させて、テストスコアと共に記録させた。1回の訓練の終りには挙手によって、特に上位者の進歩の度合を確認、発表してクラスの士気の鼓舞

に努めた。同一テキストの単調さを防ぐため、時々程度や題材の異なる教材を導入したり、努力目標の再確認を挟むことも試みた。なお、比較的難しい語彙については、プリント、板書等によって事前に学習させたり、脚注を読ませたりした。週1回という訓練の間歇性を補うために速読の自習課題を与えたり、夏休みには多読用教材として別のテキストを1冊読ませたりした。

以上の種々の指導に対して学生は比較的によく協力したといえる。

2-3 調査の概要

5ヶ年度に亙る一連の速読指導の実践記録を基に、次の事項を調査した。(1) 訓練開始前の速読力 (2) 訓練による速読力の伸び—— a. 年度別比較 b. 群別比較 c. 訓練条件別比較 (3) 速読力と他の学力との関係 (4) 訓練に対する学生の反応。

測定用具としては安藤・Sell(1971)のFRE付属の7回分のテスト(T1~T7)を用いた。第1箇学期にはT1~T3を、第2箇学期に亙る場合には更にT4~T7の使用を原則とした。FRE T1~T7の構成を表4に示す。T1~T7は同一の筆者によって書かれた英国事情の記述文であり、難易度もほぼ均一である⁽¹⁴⁾。10箇の理解度テスト(4選択)はほとんどが本文の要旨に関する設問である。

〔表4〕 FREテストの構成

テスト	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7
語数	1,175	950	825	1,050	925	775	925
RE	62	55	61	57	61	65	62

RE=Reading Ease. Fleschのリーダビリティ公式(1948)による。

「他の学力」の資料としては入学試験、

及び入学直後の諸テストの結果を用いた。学生の反応はアンケートを実施して調べた。

速読力を表わす指標としては、一般に用いられている“WPM”と理解度テストの“SCORE”の他に、WPMに理解率を乗じた“RATE”⁽¹⁵⁾も併用することにした。別にメリス速読法の点数も使用した。

統計処理は電算機で行ない、対象者を“MEAN”(全員)、“GOOD”(上位25人)、“POOR”(下位25人)⁽¹⁶⁾の3グループに分けて、WPM、SCORE、RATE等についての平均、標準偏差等を算出した。又、必要に応じて相関係数、平均の差のt検定を行なった。

2-4 調査の結果

速読訓練の年度別統計資料は付表1に示す。それに基づいたグラフを図1に、伸び率等を表5に示す。

(1) 訓練開始前の速読力

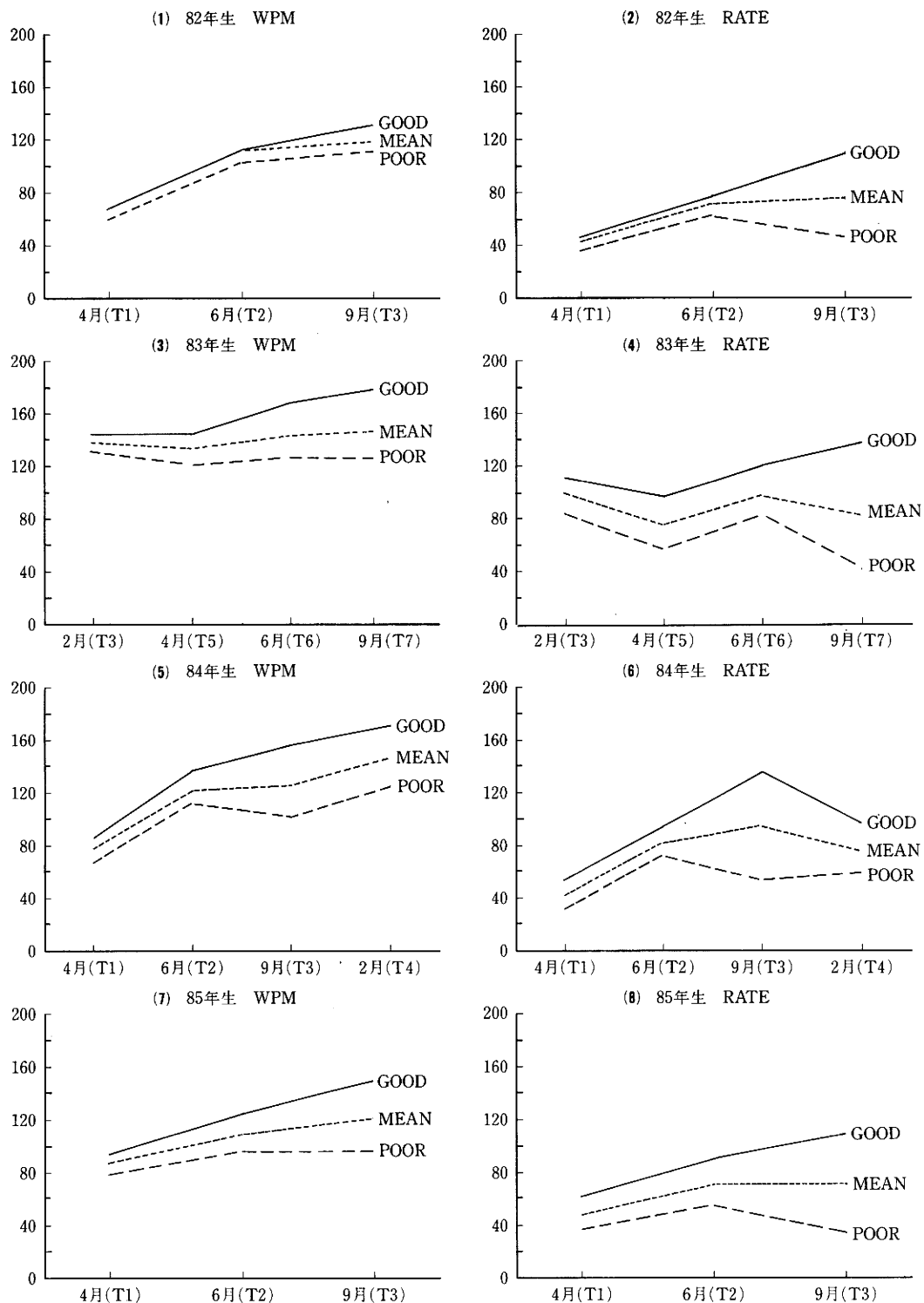
事前テスト(T1)を実施しなかった83年度生の場合を除き、T1の成績はWPMが66~86(M78; Mは全年度の平均)、SCOREが4.8~6.1(M5.4)、RATEが40~47(M42)であった。この結果は表1に示した日本人大学生の訓練前の速読力(WPM)にほぼ等しい。但し、RATEは安藤(1972)の報告に基いて試算したRATE(47~48)よりやや低い(表5参照)。

次に、T1のWPMの標準偏差(12.5~20.8)がT2、T3のもの(18.3~39.9)に比べて小さいことに注目したい。訓練前においては上下の開きが小さいことを示すものである。

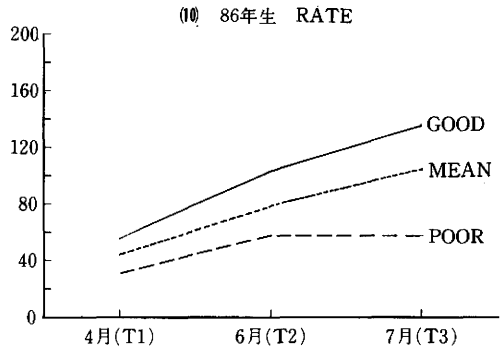
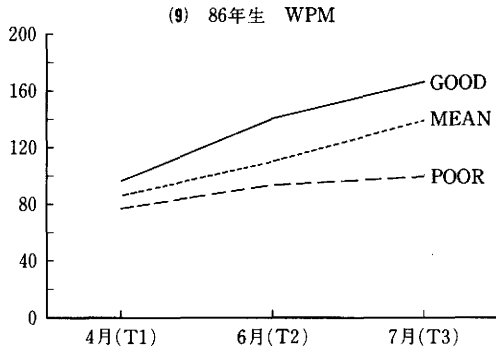
大学生の英語速読力習得の実態と問題点

〔図1〕

訓練による英語速読力習得状況



〔図1〕 —続き—



〔表5〕

訓練による英語速読力の伸び

()内はGOOD・POOR

学 生 数	区 分	訓 練 第 一 期			訓 練 第 二 期		
		事前テスト	事後テスト	伸び率(倍)*	最終テスト	伸び率(倍)*	
82年生	WPM	66 (66・63)	123 (130・118)	1.9 (2.0・1.9)			
	RATE	41 (44・34)	77 (107・45)	1.9 (2.5・1.3)			
83年生	WPM	?	138 (145・132)	?	152 (182・130)	?	
	RATE	?	98 (110・86)	?	84 (134・43)	?	
84年生	WPM	76 (85・65)	127 (158・104)	1.7 (1.9・1.6)	145 (174・128)	1.9 (2.0・2.0)	
	RATE	40 (50・31)	93 (137・52)	2.3 (2.7・1.7)	76 (98・60)	1.9 (2.0・1.9)	
85年生	WPM	85 (93・79)	119 (148・98)	1.4 (1.6・1.3)			
	RATE	47 (62・37)	71 (112・36)	1.5 (1.8・1.0)			
86年生	WPM	86 (97・78)	135 (167・103)	1.6 (1.7・1.3)			
	RATE	41 (54・30)	94 (137・56)	2.3 (2.5・1.8)			
平均	WPM	78 (85・71)	128 (150・111)	1.6 (1.8・1.6)	148 (178・129)	1.9 (2.1・1.8)	
	RATE	42 (53・33)	86 (121・55)	2.0 (2.3・1.7)	79 (116・52)	1.9 (2.2・1.6)	
参考	82~71年生	WPM	82	189	2.3	231	2.8
	RATE	48	125	2.6	166	3.5	
参考	工織~71年生	WPM	75	151	2.0		
	RATE	47	85	1.8			

*伸び率は事前テストに対するものである。

〔表6〕

RATE 150以上達成者の速読力習得状況

年 度	学 生	性 別	経*年	W P M				SCORE			R A T E			
				T1	T2	T3	伸び率	T1	T2	T3	T1	T2	T3	伸び率
86	A	M	0	106	179	332	3.1	9	9	7	95	161	232	2.4
	B	M	0	138	172	204	1.5	4	5	8	55	86	163	3.0
	C	M	0	97	139	157	1.6	5	8	10	49	111	157	3.2
85	D	M	2	125	144	239	1.9	8	8	8	100	115	191	1.9
	E	M	4	126	157	214	1.7	8	5	8	101	79	171	1.7
	F	M	2	67	121	182	2.7	6	9	9	40	109	164	4.1
	G	M	2	105	127	188	1.8	9	8	8	95	102	150	1.6
84	H	M	4	102	151	220	2.2	8	8	9	82	121	198	2.4
	I	M	1	57	199	185	3.2	4	7	9	23	139	167	7.3
	J	F	9	117	163	192	1.6	4	9	8	47	147	154	3.3
	K	M	1	84	214	216	2.6	4	4	7	34	86	151	4.4

*経年=高校卒業後の経過年数

(2) 訓練による速読力の伸び

a. 年度別比較

対象者全員(MEAN)の速読力—特にWPMの伸びは各年度とも概ね一様である。4月から6月にかけての伸びが9月に入りやや鈍化する傾向はあるものの、この1箇学期間に66~86(M78)WPMから119~138(M128)WPMへと、1.4~1.9(M1.6)倍の率で伸びている。又、RATEにおいても使用テスト、実施時期の同じである82, 84(但し2月分を除く)、85, 86の4ヶ年度は、WPMの場合と類似のパターンを示し、数値的には40~47(M42)から71~98(M86)へと1.5~2.3(M2.0)倍の率での伸びである。WPMよりもRATEの伸び率が高いということは、単に読む速さだけでなく理解度も一般的に向上したことを意味する⁽¹⁷⁾。

然し83, 84両年度の第2箇学期終了時点において、WPMは145~152(M148), 1.9倍へとある程度伸びているが、RATEが93~98(M96), 2.3倍から76~84(M79), 1.9倍に減退していることは1つの問題を提起している。これについては後に触れる。

テスト間のWPM(RATE)の相関係数は、T1・T2間で0.35~0.51(0.26~0.51), T1・T3間で0.36~0.42(0.29~0.48), T2・T3間で0.50~0.73(0.21~0.64)であった。間隔の短い86年度のT2(6月)・T3(7月)間には0.73(0.64)というかなり高い相関が見られた。この相関の程度の差は、訓練期間の長さに応じて伸び方の個人差も大きくなることを示唆するものであろう⁽¹⁸⁾。

b. 群別比較

上位群は1, 2の例外を除いてWPM, RATE共に常に上昇を保っていることが特徴的である。数値で言えば、1期間中にWPMが66~97(M85)から130~167(M150)に、1.6~2.0(M1.8)倍の率で伸びている。上位群は訓練開始前の目標150WPMを達成したといえる。同じくRATEでは44~62(M53)から107~137(M121—理解度は80%)に上り、1.8~2.7(M2.3)倍の伸びを示している。上位群の中でも特に1期でRATE150以上を達成した11人を過去3年間の中から選び、その速読力習得状況を表6(8頁)に示す。1人が332WPMを、5人が200台のWPMを達成しており、RATEで3倍以上に伸びた者が6人出ている。

他方、下位群をグラフで見ると、WPMでは上位群との差を少しずつ開きながらも継続して上昇しているが、RATEでは訓練が進むにつれて上位群との差が開き、9月には毎年大きく下降している。これは読む速さに理解が伴って行かないことを示唆している。然し数値的には下位群も1期間の訓練で71WPMから111WPMに(1.6倍)、RATEが33から55に(1.7倍)、それなりの伸びを見せている。唯、83年度生の1期終了時(2月)のT3の結果において、下位群のWPM(132), RATE(81)が他の年度(94~118, 36~56)より相当に高く、上位群との差が少ないこと、84年度の2期目の訓練結果、上位群のRATEの落込みが目立つのに下位群では逆に少し向上していることは特異な現象である。

c. 訓練条件別比較

訓練の条件による速読力取得の差を伸び率で調査する(表3, 表5参照)。

①訓練の時期、時間： 82年度生は普通の授業だけで1年間を経過した後、2年次当初にT1を受けた結果、WPMが66、RATEが41であった。これを入学直後にT1を受けた84～86年度生の速読力（WPM 76～85、RATE 50～62）と比較すると、高いどころかむしろ低い。その82年生が1期間の訓練を受けると1.9倍に伸びた。速読力は普通授業だけでは際立って養成されることがなく、訓練によらねばならないという上述の先行研究の結論を裏づけるものである。

訓練に費した延べ時間数からいうと、5時間（30分×10回）でRATEが2.3倍になった86年度が最も効率がよい。（4時間（40分×6回）で済ませた83年も、空白の事前テスト欄に4年間の平均値を代入して試算すると、WPMが1.8倍、RATEが2.3倍となり、これも86年度に劣らない効率であったと推定される。）次に効率がよかったのは84年度第1期の7時間（30分×15回）、2.3倍である。比較的効率の悪いのは82年度の10.5時間（90分×7回）、1.9倍、85年度の7.5時間（30分×15回）、1.5倍である。84年度も2期間を通してみると、9時間を費して1.9倍に後退している。第2期目の効率は極めて悪い。訓練の期間、時間、回数さえ殖せば速読力がそれだけ伸びるとはいえない。

時期については長期休暇の問題がある。群別比較で論じたように、下位群に著しい“9月下降”及び、83年生の2月から4月への下降現象には、夏休み、春休みによる訓練中断の影響が推定される。86年度には夏休み前の7月にT3を実施した所、下位群でも下降現象は止った。

②教材： RATEの伸び率の比較的高かった（推定）83年度第1期、84年度第1期、86年度の教材は、PERR(RE=82)、PFR(RE=50)、VOA(RE=62)である（略号については表3注参照）。いずれも訓練中に読ませた延べ語数が8,000～10,000語で、比較的少ない方である。PERRは易しい文章が多く、訓練初期に向く。PFR、VOAは論旨の明確な記述分であり、語彙の注がついている。PFRは使用教材の中で最も難しい文体であるが、それでも効果は上った。然し実践した印象としてはPERRとVOAを併用した86年度タイプが被験者に最も適していたといえる。

(3) 速読力と他の学力との関係

速読力と他の諸学力との関係を把握するため、速読力で有意差を持つ上位群と下位群が他のどの学力において有意差を示すかを調べた（表7参照）。

一般学力のサンプルとして㊸入試の共通一次全科目、㊹大学一般教育科目等全科目を見ると、㊸で1/5回、㊹で1/3回の割合で有意差が出ただけである。相関性は薄いというべきであろう。

英語の総合学力（近似的に㊺入試1次+2次英語、㊻一般教育英語8単位を採用）においては、㊺で2/5回、㊻で2/3回の割合で有意差が出た。かなりの相関性が推定できる。

㊺入試2次英語の中の速読問題では3/4回、㊻メリス速読テスト⁽¹⁹⁾では4/5回の率で有意差があった。同趣の速読テスト間のこととて、当然のことながら相当に高い相関性を示す。

㊺入試2次英語の中の読解問題（英文和訳を含む）及び㊼一般教育英語の中の講読4単位或いは読解力試験等の成績において、はっきり有意差が出たのは86年度だけである。82、84年度

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

〔表7〕 速読力と他の学力等における GOOD/POOR 較差

年 度	区 分	速読力	入 試 学 力				入学直後成績			一般教育等成績			高卒 経年	
		T3/7	共通1次	英1+2次	E2速読	E2読解	E2作文	聴解	リス速読	クローズ	全科目	英語		講読等
		(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)	(J)	(K)		(L)
82	G	107.4	100	100				54.6	24.8		3.59	3.89	3.88	1.92
	P	45.4	99.8	98.6				44.6	21.1		3.54	3.41	3.53	1.64
	t	16.81	0.22	0.51				1.84	2.01		0.39	2.44	1.81	0.46
	SIG	**						△	*			*	△	
83	G	134.1	100	100	100	100	100	58.0	21.1		3.42	3.34	2.88	1.16
	P	42.5	98.2	92.2	75.4	90.6	83.0	40.6	19.4		3.28	2.95	2.60	1.96
	t	8.84	2.10	2.10	2.45	1.03	1.94	2.27	0.83		1.01	2.00	1.38	-1.58
	SIG	**	*	*	*		△	*				△		
84	G	137.2	100	100	100	100	100	65.4	21.8	17.7	3.61	3.58	3.05	1.80
	P	52.1	99.8	96.1	77.5	95.2	99.5	37.2	15.2	16.6	3.28	2.90	2.72	2.44
	t	21.04	0.24	1.54	3.83	0.79	0.10	3.86	3.84	1.09	2.96	3.97	1.77	-0.68
	SIG	**			**			**	**		*	**	△	
85	G	112.3	100	100	100	100	100	49.3	20.9	16.3			64.8	1.20
	P	35.7	97.9	94.7	83.7	94.1	97.4	39.6	17.0	12.0			63.4	1.68
	t	12.80	1.43	1.30	2.04	0.71	0.38	1.15	2.02	3.3			0.38	-0.76
	SIG	**			*				*	*				
86	G	137.0	100	100	100	100	100	59.0	23.2	16.0		9.0	61.2	1.44
	P	55.6	99.8	88.4	78.7	79.9	94.6	39.0	16.4	14.4		6.9	47.8	1.80
	t	14.37	0.17	3.24	1.68	3.71	0.80	2.25	3.45	1.04		2.69	2.46	-0.60
	SIG	**		**	△	**		*	**			*	*	

(注) 1. GOOD / POOR は(A) T1 / 7 の RATE を基準に選んだ上・下位各 25 人。
 2. 入試学力は GOOD の成績を 100 とした指数で表わす。
 3. ①82~84 年は講読 4 単位成績, 85 年は講読テスト (1 単位) 素点, 86 年は読解力テスト 2 種類。
 4. SIG (有意差): △=なし, 但し P<.10 * =あり P<0.05 ** =あり P<.001。

の①は有意差に近いが、総じて予想したよりも相関性は低い。

②入試 2 次英語の中の作文 (和文英訳) においては一度も有意差が検出されていない。

③聴解力 (JACET 聴解力テスト Form A) では 5 回中 3 回有意差が出ており、他の 1 回も有意差に近い。聴解力と速読力との相関性を示唆するものとして興味深い⁽²⁰⁾。

④クローズテスト (225語, 34問) においては 3 回中 1 回の有意差であった。

参考までに⑤高校卒業後の経過年数における上下位両グループの較差を調べてみたが、有意性は全くなかった。速読力と年齢との相関性はないといえよう。

(4) 訓練に対する学生の反応

実施したアンケート (付表 2 参照) によれば、学生は速読訓練に対する総合評価を始め、速読の方法の理解度、教材・テストの難易度、訓練の量、今後の速読訓練の希望等において、概して好意的、積極的な反応を示した。速読訓練の経験では初めての者が 8 割以上を占めた。学生が速読時に注意した項目は、文章の全体的流れと主要な単語の把握、及び目の速い動きである。然し目の動きが実際に速読の障害となったと感じたものは比較的少なかった。70%以上の学生は授業以外での速読練習を殆んどやらなかった。今後の速読力獲得の目標に 150~200WPM を選んだ者が多かった。

下位群においては“詳細な事項を覚えよう”と留意し、“心中で音読”したり、“慌ててし

まって集中して読めない”ことを速読の障害としている者が特に多かった。速読を阻む要因として注目すべきである。

2-5 問題点と考察

(1) 訓練後半における伸びの鈍化・低下傾向

2-4で述べたRATEの9月鈍化(下位群にあっては下降)、及び訓練第2期目の下降現象は速読の指導上看過できない問題である。原因と思われる3点について考察したい。

a. テストの難易度 RATEの下降はその時のテストの難しさによる一時的現象ではないのかという疑問が生ずる。該当するテスト—T3, T7(9), T4(2月), T5(4月)—のREは、他と比較して特に難しいとはいえない(表4参照)。然し文体には均一性があっても、理解度テストの出題には難易の差がありうる。この点を上位群について調べると、訓練中2回以降の理解度テストで得点が5点台に下ったのは84年度のT4だけである(付表1, 図1参照)。

詳しくは、上位25人中6人が、前回のT3では皆7~10点を得ていたにも拘らず、T4では2~3点と、他の19人(5~10点)より際立って低い成績になっている。その原因を特定するには至っていないが⁽²¹⁾、T4のテスト特性には何か異常があったと思われる。

このような現象は他のテストでは見られない。そこではむしろ下位群のテスト得点の低下が全体(MEAN)のRATEの“後だれ”傾向の要因となっている。これについては下で触れる。

今後この種の理解度テストの作成を含む速読教材の標準化が望まれる所以である。

b. 長期休暇 2-4-(2)-cで述べたように、特に下位群における長期休暇後の速読力(RATE)下降については、休暇中の訓練中断による速読能力—特に言語能力の鈍化と心理的弛緩に原因があるものと推測される。

この短を補うものとして毎年夏休み中、1年次生に同一の多読課題を与えて来たが、今後は学生の能力、好みに合わせて教材の多様化を計ったり、或いは同じく多様化した速読演習教材を与えて、休暇中も速読訓練を継続して自習できるように配慮すべきであろう。

兎角も、この問題は速読訓練の効果定着についての一つの示唆を提供するものとして興味深い現象である。

c. 速読訓練過程上の特性 主として下位群に顕著であった訓練後半のRATE下降は、読む速度ではなく、内容を理解する言語能力に関わる問題である。既述のように速読力の前提には直読直解の力があり、それはまた直聞直解のヒアリングと深く関係している。下位群の聴解力が上位群より有意差をもって低い(2-4-(3))ということは、下位群が直読直解の力においても劣ることを暗示する。従ってアンケートにも出ていたように、文全体の流れよりも部分的詳細に注意を向けようとするのであり、スピードに即応して直読直解ができないから“慌て、しまって集中して読めない”のであろう。下位群においては読む速度が増すと理解度が下がるというこの現象は“bottleneck”仮説⁽²²⁾を反証したFleisher(1979)らの実験結果に一致する。

他方、上位群の速読力の伸びについても問題がある。WPM及びRATEにおいて1期間ではそ

ぞれ1.8倍、2.3倍であったが、2期間を通してみると2.1倍、2.2倍であった。第2期目においてWPMで伸びが鈍化し、RATEでは低下さえしている。これは安藤(1979:108)の言う日本人学習者のぶつかる非常に厚い“壁”にさしかかったことを示唆するものであり、速読訓練固有の問題点というべきものである。

上位、下位両群に表われたこれらの問題に対しては、速読訓練の方策と技術を改善する必要がある。例えば、到達目標は読む材料、目的、読み手の能力に応じて読み手自身が設定するというように柔軟性を持たせる。教材も語彙、文体(readability)の点からgrade化したものを準備する。理解度テストも概要を速く読み取るという速読の目的に叶ったものを精選する。語彙力、推測力を伸ばすためにクローズ法などによる演習を行なう。英作文の授業との連繫を深めパラグラフ読みの実習をする。LLと並行している現状の利点を活かして、更に直聞(読)直解の力を伸ばす。出来れば目の停留、読み取り視野、フレーズ読み等に関する指導を具体的にこなすビデオテープを作製する—等々、いずれも今後の課題である。

今一つ重要なことは、速読訓練と多読授業(指導)とを更に有機的に連繫し、訓練で高められた速読力が実際の言語活動の面で活かされるよう図ることである。速読訓練の目標も、その観点から決められるべきであって、学生にとって余りにも非現実的な目標を立て、徒らにWPMの数値で追い立てるべきではないであろう。

(2) 読解力と速度との間の低相関の問題

一般に読解力と速度との間には相関があるといわれている⁽²³⁾。然し本研究においては2-4(3)で述べたとおり、T3(T7)のRATEと他の読解力との相関性は予想を下廻って低かった。これは1つには「他の読解力」の標本とした入試の読解問題や大学一般教養での英語講読の評価が、速読時の表面的読み取りとは相当異質な力を測定していた為であろうと思われる。然し基本的には、WPMが代表する読みの速度と比較的深い読みの力との間の相関の弱さを示唆するものであろう。

では速度と表面読みとの相関は如何であろうか。これを2つの方法で調べてみた。先ず理解度テスト得点(SCORE)の上・下位群較差では、群分けに使用したT3(83年はT7)以外のテスト延べ12回中、6回に有意性が出た。次に被験者全員についてT1~T7のWPMとSCOREとの相関係数を算出すると、16回分のテストで-0.12~0.12、他2回で0.21と0.35であった⁽²⁴⁾。

や、矛盾するかに見えるこの2つの結果については次の解釈が可能であろう。抑々RATEで分けられた上位群にはWPMとSCORE両方の比較的高い者が集まり、下位群には両方とも低い者が多く集まっているはずである。従ってSCOREの群差で見た時には速読力と理解度との相関性が程度現われた。他方、全体の約50%に当る中間層にはWPMとSCOREとが逆転関係にある者—即ちその2つの能力間の相関性の低い者が相当に含まれているはずであるから、全体としては相関が出なかったのだと言えよう。

本研究におけるこの読解力・速度間の低相関という結果は普遍性を持つものであるか、それ

とも使用した測定用具(T1~T7のWPM, SCORE, RATE)乃至は測定の方法等の特性によって生じた特殊な現象であるのか、即断はできない。然し因みに、読書量を指定して読む時間を計り、その後で理解度テストを行った(定量計時法) T1~T7に代り、時間を指定して読書量を課題解決の形で計ったメリス速読テスト(定時計量法)⁽²⁵⁾ を基準にとって調べてみると、入試英語2次の読解問題との間に0.44~0.46(T3, T7では0.07~0.38)、一般教育英語講読4単位との間に0.25~0.48(T3, T7では0.13~0.18)というかなりの相関係数が得られた⁽²⁶⁾。つまり、速読力を速度そのものではなく、読み取った情報量で表わすと、他の読解力との相関はより高くなるのである。

速読指導本来の目的から見て、速読力の指標としては、速度、情報量のいずれがより妥当であるのか。もし情報量であるとするならばいかにそれを経過時間に比例する形で検出しようか。いずれも今後の課題である。

3 結 論

時代的要請から言っても、英語教育上の技能的要求から考えても、大学における英語の速読訓練は等閑にすることができない。本研究では5年間、福井医科大学学生(統計上472人)に対して実践して来た速読訓練の結果を統計、分析した。その結果次の事が判明した。

1. 訓練前の学生の速読力は78WPMであった。
2. 授業で速読訓練をしなければ速読力は伸びなかった。
3. 訓練によって全般的伸びは1箇学期でWPMが78→128(1.6)倍、理解度(%)が54→67(1.2倍)、有効読語速度RATEが42→86(2.0倍)となり、2箇学期(2ヶ年度)ではWPMが148(1.9倍)に伸びたが、理解度は52%に、RATEは79(1.9倍)に下った。
4. 訓練が進むにつれて速読力の上下の差が大きくなった。
5. 上位群は訓練と共に順調に伸びた：1期間でWPMが85→150(1.8倍)、RATEが53→121(2.3倍)。
6. 下位群は後半特にRATEが低下した：1期間でWPMが71→111(1.6倍)、RATEが33→55(1.7倍)。
7. 伸び率の比較的良かった年度の訓練延べ時間数は1期間で4~7時間(30~40分×6~14回)、訓練で読んだ延べ語数は8,000~10,000語、教材は比較的易しいもの、内容の明解なもの、語彙の注が付いているものであった。
8. 速読力と他の学力との相関性は次のようであった：一般学力で稀薄；英語の総合学力で相当にある；他の英語速読テストでは相当に高い；英語の読解力では相当に低い(但しメリス速読法ではかなりある)；作文では全くない；聴解力では相当に高い；クローズテストでは低い。
9. 速読訓練に対する学生の反応は概ね好意的で、評価は積極的であった。

以上の結果から2つの問題が論じられた。

1. 下位群に顕著な訓練後半の RATE の低下と第2期目の全般的伸びの鈍化の問題は一部テスト特性に原因が求められたが、大部分は長期休暇の影響と速読訓練途上に生ずる“壁”の障害によるものと推論され、速読訓練の方策と技術の改善が対策として考察された。
2. 読解力と速度との間の低相関がいくつかの角度から確認されその原因が推測されたが、速読力測定用具の特性によるとの疑いが出た。

* * *

本稿は計画実験の報告ではなく、5年間の教育実践の結果を考究したものである。従って資料が多く、その処理、統計も繁雑になり、未だ整理の十分でなかった所もある。然し、数年継続して来た実践から自信をもって言えることは、速読訓練は毎週小刻みに一定期間持続すれば、必ずそれなりの実効が現われるということである。唯、その指導については学習者の条件に適合するよう配慮すると共に、英語教育全般の視野に立って速読を有機的に位置づけるよう注意すべきである。要は“Students learn to read fast only by reading fast.”⁽²⁷⁾の一文に尽きよう。

注

- 1) 『朝日年鑑』1986年版(朝日新聞社)による。
- 2) 『新図書館ハンドブック』S59年度版(雄山閣)によれば、現在世界で出ている学術雑誌は約10万点に及ぶという。又、同書119頁の所載のOsbornのグラフは情報量の驚異的增加をよく表わしている。
- 3) 内藤裕央(1982), 「医学教育における第二外国語のあり方」『医学教育』第13巻第2号, 99-101頁参照。
- 4) 『医学文献の探しかた』1983年版(日本医書出版協会), 99頁参照。
- 5) 上田(1979)及び『英語教育』(1981) Vol.30, No.5 「特集=直読直解の指導」参照。
- 6) 後述の表2において、パーデュ大学及びベルギー大学生の統制群(非訓練組)の速読力の自然の伸びは1.1倍程度であったのに対し、実験群(訓練組)では1.6倍の伸びを見せている。
- 7) 'the rule'とは、概してintensive reading は授業中に指導し、extensive reading は正課外で扱うべきだという方針のことを指している。
- 8) 小池(1970), Goda(1976), Tsukamoto(1980)なども連続訓練の実施、実験報告であるがWPMでの測定がなされていないので、表2には載せていない。
- 9) Frank (1982:37), Eskey (1983:73-74) や安藤 (1972:108) らが提唱している200WPMを目指しつつ、当面は少くとも音読の速さで直読直解できることを現実的目標とした。理想に走りすぎて挫折感を招くことを恐れたためである。
- 10) scanningは1, 2回試みた程度で、本格的には扱っていない。
- 11) 70~80%とする方が理想的であるが、学生はどうしてもcomprehension check を気遣って丁寧に読もうとする傾向が強いので、故意に目標を下げた。またテスト問題が5題のことが多く、その場合4/5の正答を要求するのは速読演習としては高度すぎる。
- 12) 計時には、LLの教材提示装置を利用してデジタルストップウォッチをブースTVに映し出した。有効な方法であったといえる。
- 13) 各自がテストを終えた時ブースレコーダーの電源を切らせた。教師はコンソールパネルの出席ランプで全員の終了を容易に知ることが出来た。
- 14) REが55~65の範囲であるということは Flesch のいう'Discription of Style'のstandard~fairly difficult に当たるが、REの差が10以内であるからT1~T7は同一ランクに属するものと見てよい。
- 15) もし10点満点のSCOREなら、 $RATE=WPM \times SCORE/10$ である。後田(1982:92-93)は「理解を伴った読みの速度」と言っている。
- 16) T3(83年度生はT7)のRATEの序列によって上下25人宛を選んだ。
- 17) 5ヶ年度平均してSCOREは1期間に54%から67%に上昇している。

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

- 18) 2-4-(1)T1～3の標準偏差の件参照。
- 19) 『メリスカセット』—丸善ブックメイツ・三菱プレジジョンKKメリス教材開発室編集，三菱プレジジョンKK発行(1977年)—のスク립トを利用して，20問，計898語の“単語当て”平明クイズ形式の速読テストを作り，10分間での正解数で速読の量を測定した。
- 20) Mark D. Jackson and James L. McClelland(1979:171)参照。その他リーディングの能力と聴解力の関係については後田(1982:13-16)，石井(1970:12-13)参照。
なお，㊸入試2次英語の速読と㊹聴解テストとの間には $r=0.3\sim 0.5$ の相関があった。
- 21) T4の Part One 5の問題は解答に計算を必要とし，而も正解が曖昧である。この点が原因の1つと考えられる。然し今の問題を含めて「難」に相当する出題はT4で4問である。その数は他のテストにおける「難」題の数(3～4)と大差ない。
- 22) “bottleneck hypothesis”とは Perfetti, C, A.が1975年に発表した仮説で，個人が持つ読解処理の為の脳の空間は限られており，その中でdecodingとcomprehensionが同時に行われる。従ってdecodingがspaceを占める量が多くなる(=文字の知覚，認知の速度が遅くなる)と，comprehensionのためのspaceが少くなる(=理解が低下する)という理論である。
これに対してFleisherら(1979)は実験を行ない，poor readersの文字や単語を認知する速度は訓練によって向上したが，理解力は向上しなかった。それは単語の認知を文脈レベルに発展させる力に欠けているからだと述べている。
- 23) 吉田・北尾(1985)では読解力と速度との間に $r=0.35\sim .049$ の相関を報告している。
- 24) 86年生の訓練教材VOAにおいても，10回分のWPMとSCOREとの相関係数は，7回分が $-0.06\sim 0.17$ ，他3回分が0.25，0.32，0.33であった。
- 25) 後田(1982:92-93)参照。
- 26) メリスは英語の総合学力との間にもT1～T7より高い相関を示した。即ち入試英語1次+2次との間に0.45～0.64(T3(T7)は0.07～0.44)，一般教育英語との間には0.44～0.46(T3(T7)は0.18～0.38)の相関係数があった。因みにメリスとT3(T7)RATEとの間の相関係数は0.25～0.46である。速読テストとして両者間にこの程度の相関があることは当然であろう。
- 27) Smith(1973:195)の“Children learn to read only by reading”に録る。

参 考 文 献

- 安藤昭一(1972), 「大学英語教育における速読指導」『大学英語教育学会紀要』第3号, 55-68頁。
———(1979), 「速読の方法」波多野完治他(編)『読む英語』研究社, 106-133頁。
- 安藤昭一, David Sell (1971), *Faster Reading in English I, II* 英潮社新社。
- Beers, Penny G.(1986), “Accelerated Reading for High School Students,” *Journal of Reading* (January 1986), 311-315.
- Carroll, John B. (1972), 『英語の評価と教授』(大学英語教育学会編・訳注)大修館。
- Clarke, Marke A.(1977), “Toward a Realization of Psycholinguistic Principles in the ESL Reading Class.” Mackay et. al. (eds.) (1979 : 48-65).
- De Leeuw, Manya & Eric(1965), *Reed Better, Read Easter*. Penguin Books.
- Eskey, David (1973), “A Model Program for Teaching Advanced Reading to Students of English as a Foreign Language,” Mackay et. al. (eds.) (1979 : 66-78).
- Farhady, Hossein(1982), “Measures of Language Proficiency from the Learner’s Perspective,” *TESOL Q* 16-1, 43-59
- Fleisher, Lisa S, Joseph R. Jenkins, and Darlene Pany (1979), “Effects on Poor Readers’ Comprehension of Training in Rapid Reading,” *Reading Reasearch Quarterly* XV/1.
- Grellet, Francoise (1981), *Developing Reading Skills*. Cambridge University Press.
- Goda, Fukuko (1976), “The Development of Rapid Reading Skills in English Teaching.” 『福岡女学院短期大学紀要』12号, 31-46頁。
- 波多野完治他(編)(1979)『読む英語』研究社。
- 羽鳥博愛(1976), 「英語の学力とは何か」中島文雄(監)『新英語教育論』大修館。
- Hill, J. K.(1981), “Effective Reading in a Foreign Language: An Experimental Reading Course in English for Overseas Students,” *English Language Teaching Journal* Vol.35, No.3.
- 石井正之助(編)(1970), 『読む領域の指導』研究社。
- Jackson, Mark D. and James L. McClelland (1979), “Processing Determinants of Reading Speed,” *Journal of Experimental Psychology: General*. Vol. 108, No.2, 151-181.
- 北尾謙治, 吉田信介(1984), 「大学生の英語読解力とそのスピードの研究」『中部英語教育学会紀要』14, 28-34頁。
- 北尾謙治, 北尾 S, キャスリーン, 吉田信介, 吉田晴世(1984), 「大学生の英語読解速度の研究」『中部英語教育学会紀要』14, 168-174頁。
- 児玉徳美(1984), 「大学における英語教育」『外国文学研究』(立命館大学)62号, 99-110頁。
- 小池生夫(1970), 「大学英語教育における速読とライティングを中心とした多角的授業の研究」『大学英語教育学会

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

紀要』創刊号, 95-106頁。

Krashen, Stephen D. & Tracy D. Terrell(1983), *The Natural Approach*. Pergamon.

Lewis, Norman (1978), *How to Read Better and Faster*. Harper & Row.

Mackay, Ronald, Bruce Barkman and R. R. Jordan (eds.)(1979), *Reading in a Second Language*. Newbury House.

松村幹男(編)(1984), 『英語のリーディング』大修館。

Nuttall, Christine (1982), *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. Heinemann Educational Books.

小川芳男(1965), 「大学の英語教育(3)―速読論」『英語青年』Vol. CXI. No.10, 676-677頁。

大谷泰照(1979), 「日本人と国際理解―外国語の教育を考えるために」羽鳥博愛・伊村元道(編)(1979), 『外国語教育の理論と構造』学習研究社。

大友賢二(1981), 「TOEFLと学校英語」『英語教育』Vol. 30 No. 7, 11-13頁。

Phillips, June K. (1984), “Practical Implications of Recent Research in Reading,” *Foreign Language Annals* 17, No.4, 285-296.

Smith, Frank (1973), *Psycholinguistics and Reading*. Holt, Rinehart and Winston.

————— (1982), *Understanding Reading*. Holt, Rinehart and Winston.

————— (1983), *Essays into Literacy*. Heinemann Educational Books.

竹蓋幸生(1982), 『日本人英語の科学』研究社。

Tsukamoto, Tomoo (1980), “Teaching Reading at the College Level,” 『大学英語教育学会紀要』第11号, 53-70頁。

上田明子(1979), 「直読直解」波多之完治他(編)『読む英語』研究社, 78-105頁。

後田忠勝(1982), 『読むことの指導』東京書籍。

山田 純(1984), 「速読と速読指導」松村幹男(編)『英語のリーディング』89-103頁。

山崎純一, 吉沢清美(1986), 「英文のリーディング速度と英語力」『大学英語教育学会第25回大会』口頭発表。

吉田信介, 北尾謙治(1985), 「5つの読解テストを利用した大学生の英語読解速度及び理解度の研究」『中部地区英語教育学会紀要』15。

藤 枝 宏 壽

〔付表1〕

英語速読訓練結果統計一覽

〔*GOOD/POOR 基準〕 ()内は標準偏差

年度	人数	区 分	FRE TEST 1 (83年4月)	FRE TEST 2 (83年6月)	FRE TEST 3* (83年9月)	FRE TEST 4/5	FRE TEST 6	FRE TEST 7	
82	89†	W P M	MAX	120	165	194			
			GOOD	66.1 (14.4)	114.0 (23.2)	129.7 (20.4)			
			MEAN	65.8 (12.5)	113.0 (21.2)	122.5 (18.5)			
			POOR	62.5 (7.6)	104.4 (20.8)	118.0 (16.4)			
			MIN	46	58	83			
		S C O R E	MAX	10	10	10			
			GOOD	6.6 (2.0)	6.8 (1.5)	8.4 (0.9)			
			MEAN	6.1 (2.1)	6.5 (1.7)	6.3 (2.0)			
			POOR	5.4 (2.2)	6.3 (1.7)	3.9 (1.3)			
			MIN	1	2	2			
		R A T E	MAX	89.0	148.5	135.8			
			GOOD	43.5 (14.5)	78.0 (25.3)	107.4 (12.4)			
			MEAN	40.5 (16.1)	73.1 (23.9)	76.9 (25.7)			
			POOR	34.3 (14.8)	65.3 (21.6)	45.4 (13.1)			
			MIN	5.5	21.6	25.0			
年度	人数	区 分	FRE TEST 1	FRE TEST 2	FRE TEST 3 (84年2月)	FRE TEST 5 (84年4月)	FRE TEST 6 (84年6月)	FRE TEST 7* (84年9月)	
83	91†	W P M	MAX	XXX	XXX	320	307	375	400
			GOOD	XXX	XXX	144.6 (45.3)	143.9 (48.2)	165.4 (52.0)	181.9 (52.0)
			MEAN	XXX	XXX	138.0 (37.9)	130.2 (38.8)	147.5 (42.5)	151.9 (44.4)
			POOR	XXX	XXX	131.8 (24.7)	120.9 (32.9)	128.6 (28.6)	129.5 (41.1)
			MIN	XXX	XXX	99	76	70	72
		S C O R E	MAX	XXX	XXX	10	9	9	10
			GOOD	XXX	XXX	7.5 (2.1)	6.4 (1.5)	7.3 (1.2)	7.4 (1.3)
			MEAN	XXX	XXX	7.1 (1.9)	5.5 (1.5)	6.7 (1.5)	5.5 (1.9)
			POOR	XXX	XXX	6.5 (1.8)	4.9 (1.2)	6.5 (1.6)	3.6 (1.5)
			MIN	XXX	XXX	3	3	2	2
		R A T E	MAX	XXX	XXX	316.0	245.6	337.5	360.0
			GOOD	XXX	XXX	109.7 (55.3)	94.6 (45.1)	121.2 (50.7)	134.1 (49.8)
			MEAN	XXX	XXX	98.4 (42.1)	72.7 (34.1)	98.0 (39.4)	83.8 (44.2)
			POOR	XXX	XXX	85.5 (30.4)	58.9 (22.5)	82.8 (28.3)	42.5 (10.0)
			MIN	XXX	XXX	36.3	24.6	24.6	20.0
年度	人数	区 分	FRE TEST 1 (84年4月)	FRE TEST 2 (84年6月)	FRE TEST 3* (84年9月)	FRE TEST 4 (85年2月)	FRE TEST 6	FRE TEST 7	
84	98†	W P M	MAX	122	214	220	274		
			GOOD	84.8 (19.6)	137.3 (29.3)	157.6 (26.0)	173.6 (43.1)		
			MEAN	76.0 (18.8)	120.8 (29.3)	126.9 (30.7)	145.4 (40.0)		
			POOR	64.6 (15.9)	114.6 (26.3)	103.6 (28.1)	127.7 (33.4)		
			MIN	41	75	62	92		
		S C O R E	MAX	9	10	10	9		
			GOOD	5.8 (1.6)	6.7 (1.6)	8.8 (1.0)	5.8 (2.1)		
			MEAN	5.2 (1.7)	6.7 (1.6)	7.3 (1.8)	5.3 (2.0)		
			POOR	4.9 (1.7)	6.3 (1.2)	5.3 (1.4)	4.6 (2.0)		
			MIN	0	1	2	0		
		R A T E	MAX	85.4	152.1	198.0	211.5		
			GOOD	50.0 (17.1)	90.5 (25.1)	137.2 (18.0)	98.4 (39.2)		
			MEAN	39.5 (17.3)	79.8 (26.5)	92.5 (33.3)	75.8 (35.2)		
			POOR	30.9 (12.6)	72.2 (21.4)	52.1 (8.3)	60.1 (32.0)		
			MIN	0	10.8	36.8	0		

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

年度	人数	区分	FRE TEST 1 (85年4月)	FRE TEST 2 (85年6月)	FRE TEST 3* (85年9月)	FRE TEST 4/5	FRE TEST 6	FRE TEST 7	
85	99†	W P M	MAX	130	222	239			
			GOOD	93.2 (20.7)	124.4 (30.9)	148.2 (33.6)			
			MEAN	84.8 (19.3)	108.1 (23.6)	118.9 (31.1)			
			POOR	78.7 (16.9)	97.4 (15.1)	98.4 (21.8)			
			MIN	43	56	67			
		S C O R E	MAX	10	9	10			
			GOOD	6.5 (1.6)	7.3 (1.4)	7.6 (1.1)			
			MEAN	5.5 (2.0)	6.3 (1.7)	5.9 (1.9)			
			POOR	4.9 (2.3)	5.6 (1.4)	3.8 (1.2)			
			MIN	0	2	2			
		R A T E	MAX	116.0	144.9	191.2			
			GOOD	61.5 (24.2)	89.8 (23.9)	112.3 (28.2)			
			MEAN	47.1 (21.5)	68.4 (23.9)	71.3 (32.5)			
			POOR	37.2 (19.3)	55.0 (15.8)	35.7 (8.1)			
			MIN	0.0	15.8	18.0			
86	95†	W P M	MAX	144	204	332			
			GOOD	96.8 (23.0)	139.5 (35.0)	167.0 (50.6)			
			MEAN	86.0 (20.8)	112.3 (30.8)	134.5 (39.9)			
			POOR	77.8 (14.8)	95.3 (23.8)	102.8 (22.6)			
			MIN	45	61	66			
		S C O R E	MAX	10	10	10			
			GOOD	5.5 (2.0)	7.4 (1.6)	8.6 (1.5)			
			MEAN	4.8 (2.0)	7.0 (1.7)	7.0 (1.8)			
			POOR	3.8 (1.7)	6.2 (1.8)	5.5 (1.3)			
			MIN	0	2	3			
		R A T E	MAX	98.4	162.0	232.4			
			GOOD	54.0 (23.8)	103.3 (31.3)	137.0 (23.9)			
			MEAN	41.3 (20.4)	78.2 (28.7)	93.7 (33.5)			
			POOR	30.2 (14.6)	57.9 (18.8)	55.6 (14.1)			
			MIN	0	24.4	19.8			

(†単位既修得者、欠席、休学者を除く)

附表2

英語速読についてのアンケートとその集計* (86.7.8)

No. _____ 氏名 _____

★これまでやって来た英語の速読訓練について質問します。今後の速読教育の参考資料にしたいので、率直に答えて下さい。(該当するものに○をつける)

1) この大学に入学する前に速読訓練をやったことがありますか。

1. ない 78 (21/20)
2. ある 16 (4/4)

(a 中学で b 高校で c 予備校で d 他大学で e 自分で f その他)

** 2) あなたの現在の速読力はどのくらいですか。

** 3) 4月以来どのくらい進歩しましたか。(Rateで)

** 4) その進歩の度合いについて満足していますか。

- 1.大いに 2.まあまあ 3.何ともいえぬ 4.あまり～ない 5.全く～ない
(++) (+) (?) (-) (--)

⇒ [この後時々、答えの程度を上記の記号で代用します。]

5) あなたが速読する時、最も気を配っていることは何ですか。

(1つか2つの項目に○をつけなさい。)

1. 目を速く動かす 25 (6/8)
2. 一時に多くの単語を読み取る 16 (6/4)
3. 主要な単語を拾う 35 (9/7)
4. 詳細な事項を覚える 15 (1/8)
5. 各パラグラフの要点をつかむ 18 (5/4)
6. 文章全体の流れをつかむ 41 (13/10)

6) あなたが速読する時、最も障害になるものは何ですか。

(1つか2つの項目に○をつけなさい。)

1. 眼球的動きが悪い 14 (3/3)
2. 心の中で声を出して読んでしまう 31 (6/20)
3. 語彙力が少ない 31 (8/5)
4. 英文の直読直解が十分できない 28 (8/8)
5. 読んだことを覚えておれない 27 (8/10)
6. 慌ててしまい、集中して読めない 34 (7/11)

その他速読で困ったことがあったら、何でも書いてください。

(_____)

7) 総合的に見て、このコースで速読訓練をやった良かったと思いますか。

1. (++) 13 (4/3) 2. (+) 45 (13/10) 3. (?) 29 (6/10)
4. (-) 8 (2/2) 5. (--) 0 (0/0)

大学生の英語速読力習得の実態と問題点

- 8) 速読の方法は理解できましたか。
1. (++) 2 (0/1) 2. (+) 53(18/13) 3. (?) 23 (4/4)
 4. (-) 13 (2/5) 5. (--) 4(1/2)
- 9) 訓練に使った教材の英語の程度は適当でしたか。
- A: VOA 1. 難 10 (3/4) 2. 適 81 (20/21) 3. 易 2 (1/0)
 B: その他 1. 難 12 (3/6) 2. 適 79 (21/18) 3. 易 1 (0/0)
- 10) 訓練に使った教材の comprehension test は適当でしたか。
- A: VOA 1. 難 10 (1/6) 2. 適 77 (18/19) 3. 易 2 (2/0)
 B: その他 1. 難 9 (2/4) 2. 適 74 (17/19) 3. 易 2 (2/0)
- 11) 授業における速読訓練の量 (1週間1回30分程度) は適当でしたか。
1. 多 12 (5/4) 2. 適 63 (16/14) 3. 少 17(3/6)
- 12) 授業以外にも (例: 家で) 時間を計って速読練習をよくしてきましたか。
- A: 中間テスト前 (合計で) ⇒
1. 10回以上 1 (1/0) 2. 9~7回 1 (0/3)
 3. 6~4回 17 (5/3) 4. 3~1回 48 (10/13)
 5. 0回 23 (9/5)
- B: 中間テスト後 (合計で) ⇒
1. 10回以上 2 (2/0) 2. 9~7回 5 (0/0)
 3. 6~4回 23 (7/6) 4. 3~1回 48 (9/13)
 5. 0回 17 (7/4)
- 13) 4月に速読訓練を始めて以来、授業以外で英文を読むときでも、意識的に (あるいは無意識的に) 速く読もうとしたことがありますか。
1. よく 12(6/3) 2. 時々 54 (12/15) 3. ない 28 (7/6)
- 14) 今後あなたはどれくらいの速読力を定着させたいと思いますか。(7割程度の理解度で)
1. 100WPM 3 (0/2) 2. 130WPM 11 (0/8)
 3. 150WPM 18 (4/5) 3. 180WPM 34 (7/10)
 5. 200-250WPM 21 (8/0) 6. 251-300WPM 6 (5/0)
 7. 301WPM以上 1 (1/0)
- 15) 速読の訓練を今後も続ける必要があると思いますか。
1. ある--授業で 10 (2/3) 2. ある--自分で 24 (7/7)
 3. ある--授業でも、自分でも 44 (12/9)
 4. ない 2 (1/0) 5. 何とも言えない 15 (3/6)
- 16) その他、速読についての、意見や感想を書いてください。(特に、医学生として、英語の速読力はどんな面で必要とされるかなど)
- (_____)

(注) * 総数95人 (GOOD25人/POOR25人)

** 調査時点でデータが不完全であったため、未回答に終わった。

The Improvement of Fast Reading Ability in College Students

—Realities and Problems—

Koju Fujieda

In view of the demand of the current internationalized information society and as an intrinsic requirement for reading skill in EFL, fast reading training should not be neglected in college English education, where the students finish their eight-year English study at school.

This paper reports the results of the fast reading courses for 472 Fukui Medical School students in the past five years. The findings were:

1. The students' speed of reading was 78 WPM before the training.
2. Their speed of reading remained unimproved after a year of English courses that did not include fast reading practice.
3. Fast reading training brought all classes after a one-semester course gains of from 78 to 128 (1.6 times) in WPM, from 54 to 67% (1.2 times) in comprehension, and from 42 to 86 (2.0 times) in efficiency RATE. Two classes after another semester reached 148 WPM (1.9 times), but fell to 52% in comprehension and to 79 (1.9 times) in RATE.
4. As the course proceeded, the disparity between good and poor readers got wider.
5. The GOOD group improved consistently with training: there was a gain in one semester of from 85 to 150 (1.8 times) in WPM and from 42 to 121 (2.3 times) in RATE.
6. The POOR group regressed in the latter half of the course, especially in RATE, but eventually they gained from 70 to 111 WPM (1.6 times) and from 33 to 55 (1.7 times) in RATE.
7. In the years with the highest improvement rate, the total number of training hours was 4 to 7 hours per semester (30 to 40 mins. x 6 to 14 sessions). The total number of words read was 8,000 to 10,000 and the materials used were of comparatively easy and/or clear-cut style, with vocabulary notes.
8. The correlation of fast reading ability with general scholastic abilities was very low. The correlation was fairly high with overall English abilities while that with reading comprehension was considerably lower (though

the Mellis fast reading test detected a higher correlation with reading comprehension). There was no correlation with composition ability, while there was a considerably high correlation with listening comprehension.

9. The reaction of the students to the training was generally favorable and their evaluation was mostly positive.

From the above results, two problems emerged:

1. The remarkable regression of the POOR group in RATE in the latter half of the course and the overall slowdown in the rate of improvement could be attributed partly to some peculiarities of the tests but mostly to the effects of long vacations and some barriers which appear to exist in the course of fast reading training. Apparently some improvements are necessary in the strategy and tactics of the training.
2. The considerably low correlation between reading speed and comprehension was analyzed and interpreted, but not definitely accounted for, and there is some suspicion that the measuring method of fast reading might be involved in the problem.

* * *

The experience of fast reading training and research assures the author that weekly practice for a small amount of time is certain to lead to almost double the present speed, if the training is well integrated with other aspects of language teaching. In short, "students learn to read fast only by reading fast."